連盟だより
公益社団法人　日本精神保健福祉連盟
Japan Federation for Mental Health and Welfare
2018- 2.10　　通刊61号

厚生労働省 障害保健福祉部 精神・障害保健課長に就任して

厚生労働省　社会援護局
障害保健福祉部　精神・障害保健課　課長　**武 田 康 久**

公益社団法人日本精神保健福祉連盟の会員・関係者の皆様には、日頃より精神保健福祉行政の推進にご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

精神保健医療福祉施策につきましては、措置入院者が退院後に十分な支援を受けられていないという現行法の課題を踏まえ、措置入院者が退院後も継続的に医療等の支援を確実に受けられる仕組みづくりが求められています。さらに、医療保護入院制度等については、有識者による「これからの精神保健医療福祉のあり方に関する検討会」で取りまとめられた報告書の内容を踏まえ、精神障害者に対する適切な医療及び保護を確保するため、入院手続等の見直しが必要です。この他、精神保健指定医の不正取得問題については同様の事案の再発防止を図る必要があり、これらの観点から、所要の制度改正のための法案を昨年の通常国会に提出しましたが、衆議院の解散に伴い廃案となり、成立をみるに至りませんでした。法案の取扱いについて、今後検討してまいります。

さらに、有識者検討会においては、あるべき地域精神保健医療福祉体制を見据えた新しい中長期の目標として、「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築を目指すことが示され、平成30年度から新たにスタートする第５期障害福祉計画においても大きな柱の一つとして提示されています。こうしたことから、精神障害者が地域の一員として安心して自分らしい暮らしをすることができるよう、保健・医療・福祉関係者による協議の場を通じて、地域の課題を共有した上で、精神科病院等の医療機関、地域援助事業者、自治体関係部局などとの連携による支援体制を構築し、各地域において、「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築に資する取組を推進しているところです。

依存症対策につきましては、アルコール健康障害対策の業務が、昨年４月に内閣府から厚生労働省に移管され、また、薬物依存症対策の関係では、再犯の防止等の推進に関する法律に基づき、これらの内容も含めた再犯防止推進計画が昨年12月に閣議決定されました。ギャンブル等依存症対策の関係では、特定複合観光施設区域の整備の推進に関する法律案の附帯決議を踏まえ、昨年８月に関係閣僚会議において「ギャンブル等依存症対策の強化について」がまとめられ、さらに議員立法によるギャンブル等依存症対策基本法案が国会に提出されるなど、依存症全般を取り巻く環境はめまぐるしく変化しています。こうした状況を踏まえ、厚生労働省としては、医療・相談支援体制の整備や人材育成、関係機関の連携、自助グループ等の民間団体への支援の充実など依存症対策の推進を図ってまいります。

平成27年９月16日に成立しました公認心理師法は、昨年９月15日に、関係政省令が公布され、施行されました。今年は、第１回公認心理師試験が行われ、初の公認心理師が誕生することとなります。今後は、現任者講習会の指定・開催を進めるとともに、公認心理師試験が円滑に施行されるよう、万全を期していく所存です。

心身喪失者等医療観察法につきましては、施行されてから12年が経過し、指定入院医療機関の病床の確保が着実に進められ、現在、833床整備されています。また、指定通院医療機関につきましても、病院と診療所をあわせて595カ所の医療機関が指定されており、整備数としては当初の目標を達成しているところです。しかしながら、一部の地域においては、なお不足が生じていること、また、一部の入院処遇対象者の入院期間が長期化していることなど、課題も指摘されており、昨年11月から有識者による懇談会を開催し、現在の医療観察法における医療体制について評価等を行っております。今後も引き続き、対象者の適切な医療体制の確保と円滑な社会復帰に向けた取り組みを進めてまいります。

上記以外にも、精神保健福祉行政における様々な課題の解決に向けて、引き続きご理解・ご協力をお願いするとともに、皆様の益々のご発展を祈念し、挨拶とさせていただきます。

第65回精神保健福祉全国大会が開催される

公益社団法人　日本精神保健福祉連盟　事務局長　**中 山 拓 治**

平成29年10月20日に滋賀県大津市、びわ湖大津プリンスホテルで、第65回の精神保健福祉全国大会が厚生労働省及び公益社団法人日本精神保健福祉連盟が主催し、滋賀県、大津市、（公社）日本精神科病院協会滋賀県支部、滋賀県精神保健福祉協会が共催、最高裁判所、内閣府ほか多数の中央省庁、各種障害者団体、医療関係団体等の後援を受けて滋賀県内外の精神保健福祉関係者や精神に障害を抱える当事者等約1,000人が参加して開催されました。

本大会は、「湖国で語ろう」～新たなる共生社会を目指して～　をテーマに、全国の精神保健福祉関係者並びに一般の方々と共に地域における精神保健福祉に関する理解を深め、正しい知識の普及と精神保健福祉施策の推進を図ることを目指していくものです。すべての国民が障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現につなげることを目的として、平成28年４月「障害者差別解消法」が施行されました。子供から高齢者、障害者、すべての方々が自らできることを見つけるともに、お互いに尊重し合い、誰もが必要とされていると感じられる共生社会の実現を目指し、開催されたものです。

午前10時から始まった記念式典では、最初に前年開催地の群馬県から「心をひらく鍵」の引き渡しが行われた後、山田尚登大会実行委員会会長の開会の言葉に引き続き、鮫島健（公社）日本精神保健福祉連盟会長の式辞、厚生労働大臣、滋賀県知事、大津市長の挨拶がありました。その後、精神保健福祉事業功労者の表彰に移り、個人56名及び11団体に厚生労働大臣表彰状が授与され、続いて（公社）日本精神保健福祉連盟会長表彰、滋賀県知事表彰、滋賀県精神保健福祉協会長表彰が行われました。

受賞された皆様には日頃からの活動に敬意を表すると共に、心からお慶びを申し上げます。

記念式典は、最後に次回開催県の山形県武田啓子健康福祉部長から歓迎の挨拶で滞りなく終わりました。

記念式典終了後には、アトラクションとして滋賀県在住のフリーアナウンサーの川端まゆみさんから「みんなの誌」と題して誌の朗読がありました。また、様々な薬物依存から回復を目指して活動している「淡海響組」の皆様による和太鼓演奏をエネルギッシュにご披露いただき、会場を大変盛り上げてくれました。アトラクションにご出演していただいた皆様には、感動をいただき、また、熱演をどうもありがとうございました。

午後からは、「心の壁を破る」～比叡山の修業を通して掴んだもの～をテーマにした比叡山延暦寺円龍院住職宮本祖豊様の記念講演がありました。宮本住職は比叡山延暦寺の厳しい修行の中で、荒行としてよく知られる千日回峰行より厳しいと言われる「十二年籠山行」という俗世と12年も断絶して伝教大師に仕える修業を満行されました。

講演では、「十二年籠山行」とはいかなるものか「日に当たりませんから顔もだんだん白くなってきて、体はどんどん冷たくなってきました。最初は足先が冷たくなり、次第に足の股関節ぐらいまで冷たくなって感覚がなくなりました。手も指先からどんどん冷たくなってきて、噛んでも痛みを感じないほどでした。ご飯を食べても舌が死んでいるので満腹感もありませんでした。そのうち肩まで冷たくなってきました。心臓が冷たくなったらおしまいです。死が刻々と迫ってくるのが分かりました。」などと語られていました。

その後の「湖国で語ろう」～新たなる共生社会を目指して～のテーマでのシンポジウムでは、山田大会長が座長を務め、シンポジストとして次の四名の方々が登壇し、「みんなでいっしょに働き、みんなとまちで生きる」という理念のもと、障害のある人が「地域で暮らし、働き、活動することの実現」に向けて滋賀県における様々な取り組みについて意見が交わされました。

西浦　正氏（滋賀県断酒同友会会長）

同氏は酒で問題を抱えた方への啓発、相談活動を行っており、又定期的に免許センターにて飲酒運転防止講和、刑務所にて断酒のすすめ、個別面談を行っています。

尾畑　聡英氏（特定非営利活動法人滋賀県精神障害者家族会連合会理事長）

同氏は精神障害のある人の住まいの確保、障害間格差等諸問題が課題となっている現状を受け、全国の各精神保健福祉関連団体や地元の民間事業者と連携を取りながら啓発活動を行っています。

岡本　律子氏（脳外傷友の会「しが」代表）

同氏はピアカウンセリング・サポーターとして高次脳機能障害者とその家族の相談支援を行っています。

山崎　秀樹氏（社会福祉法人さわらび福祉会スポットライフくれぱす施設長）

同氏は精神科ソーシャルワーカーの資格を持ち、同施設においてひきこもりがちな暮らしを送る方の支援、その人たちを取り巻くまちづくりを推進しています。

本大会は、畑下大会実行委員会副会長の閉会の言葉で盛会のうちに閉幕しました。

今大会を成功裡に終えることができましたのは、大会実行委員会の山田会長はじめ実行委員会の委員の方々、そして滋賀県、大津市並びに関係団体の皆様のおかげであり、ご協力に心より厚く御礼申し上げます。

第17回全国障害者スポーツ大会が開催される（精神障害者バレーボール）

公益社団法人日本精神保健福祉連盟　精神障害者スポーツ推進委員会　委員　**田所淳子**

平成29年度「第17回全国障害者スポーツ大会　愛顔つなぐ愛媛大会」が愛媛県で開催されました。精神障害者が参加できる正式種目はバレーボールだけですが、今年は関係機関のご尽力により、フットサルがオープン競技として採用され、西条市ビバ・スポルティアSAIJOにおいて10月28～29日に開催されました（優勝　千葉県、準優勝　神奈川県）。

さて、精神障害者バレーボール競技は、魚とみかんの町、八幡浜市民スポーツセンターにおいて、10月28～29日に行われました。各ブロック代表６チーム（青森県・埼玉県・三重県・大阪府・岡山県・福岡県）と地元愛媛県チームの合計７チームが参加し、トーナメント方式での競技です。

試合は１回戦から白熱したプレーが続き、まさに全国の予選大会を勝ち抜いてきたチームレベルだというのがよく解ります。ラリーが続き、コートの外に飛び出たボールも果敢に拾いに行く勇ましい姿に、客席から感嘆の声と拍手が沸き起こる場面もたくさんありました。

勝負とは面白いもので、昨年優勝した埼玉県は初戦で姿を消し、まさに下剋上の世界です。天井高く上がるサーブや速攻、バックトス、強烈アタック、と攻撃を多彩に繰り返すチームが増えて、毎年確実に競技レベルが向上しています。地元の愛媛県チームも春以後の強化練習の効果が出ているようで、非常に動きがよくなっており、たくましくなっていました。

そして今大会の圧巻は、何と言っても客席の大応援団です。客席左右に分かれて向かい合わせに位置する各100人超えの応援団が、先導リーダーの指示に合わせた掛け声とバルーンスティックで担当チームを応援するのですが、これが非常に面白く、素晴らしいのです。側聞するに、開催地の八幡浜市役所が先導して市民や関係団体から応援協力者を募り、大応援団「みーも」を組織したとか。設立・募集にあたっては民間団体もこぞってPRし「全国のチームを応援しに行こう！」の誘いに、これだけの市民が集まり、声を枯らして来県チームを応援する姿に驚きと感動を覚えずにはいられませんでした。

試合の結果は、横綱相撲級の熱戦決勝で、福岡県が初優勝。優勝カップが初めて九州に渡ることになりました。そして優勝チームと同等レベルの大阪府が準優勝。３位は青森県でした。

今回は、全体の開会式が遠隔地の松山市で行われたため、開会式には精神障害者選手は参加せず、体育館で実質1日半の試合日程でしたが、応援団以外の観客も多く、非常に盛り上がった大会であったと思います。

精神障害者バレーボールはオープン競技時代の６年間を経て、平成20年に正式競技となり、今年がちょうど10回目となります。丸９年を経て、運営面はもう随分円滑に準備・開催されるようになってきたと思いますが、それでも事務局や実施本部は相当のご苦労があることとお察しします。しかし、この事業に向けて選手たちが日々汗を流して努力をし、この栄えある舞台で涙を流し、全国の仲間たちと笑顔で交流している姿を見ると、この事業の意義を感じ大変嬉しく思います。

来年の平成30年度大会は福井県で開催され、精神障害者バレーボールの会場は小浜市です。来年に向けて、また全国のたくさんの競技選手が練習を積み、スポーツを通じて生活の幅が広がることを期待しています。

アートとトークによる多様性尊重の社会づくり展「かく、みる、つなぐ―こころの軌跡をたどる」開催される

一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会　会長　**竹　島　　正**

本協議会では、こころの健康問題を経験したひとたちとそのアートを中心に据え、イベントや交流をとおして、こころの健康、ひとの繋がり、社会のあり方などについて改めて考え合うことを目的として、川崎市、日本精神保健福祉連盟、日本財団の共催のもと、アートとトークによる多様性尊重の社会づくり展「かく、みる、つなぐ－こころの軌跡をたどる」（平成29年12月２－17日）を開催しました。

展覧会では約80点の作品展示のほか、会期中に７回のイベントを開催しました。

展覧会は「有馬忠士―夢宇宙の闇と光をめぐる旅」、「王様と私と強者たち」、「クロマニンゲン集合」、「特別展示　東野健一作品」で構成されました。

12月２日のオープニングセレモニーでは、主催・共催団体あいさつの後、参加アーティストがそれぞれの制作や思いを自由に語る「クロマニンゲン宣言」が行われました。

オープニングセレモニー

その後のトークイベントの主な登壇者は下記のとおりです（敬称略）。

12月３日「ともにそだて、ともにいきる」（塩野義製薬共催）：滝川一廣（学習院大学）、佐藤幹夫（ジャーナリスト）、島薗進（上智大学グリーフケア研究所）

12月９日「つらくなること、なやむことを、ちからにする」：古茶大樹（聖マリアンナ医科大学）、杉山春（ジャーナリスト）、こころの健康問題を経験した市民など

12月10日「子どもが逆境を経験することについて」：石井光太（ジャーナリスト）、大塚俊弘（国立精神・神経医療研究センター）

12月13日「みえないから、みえる」（日本うつ病センター共催）：成澤俊輔（NPO法人FDA）、生駒芳久（特定医療法人和歌浦病院）

12月16日「コミュニティのトラウマとアートの役割」：オイゲン・コウ（メルボルン・精神科医）、福地成（みやぎ心のケアセンター）

12月17日「かく、みる、つなぐ、作品の社会的価値と保存を考える」：安彦講平（造形教室／アーティスト）、織田信生（アーティスト）、坂井貞夫（クロマニンゲン展／アーティスト）、服部正（甲南大学）、オイゲン・コウ、杉山春（ジャーナリスト）、山之内芳雄（国立精神・神経医療研究センター）

16日間の会期中の来場者は、展覧会626人、７回のイベントの合計240人でした。

本協議会はこれまでアートをとおしての精神保健の啓発に取り組んできましたが、今回の展覧会はそれをさらに発展させるものとなりました。

アートをとおしての精神保健の啓発は、作者であるこころの健康問題を経験したひととその作品への尊敬を基盤として、社会にメッセージを伝えていく具体性をもちます。本協議会では、この取組をさらに発展させたいと思います。

最後になりますが、展覧会のご協力いただいた皆さまに深く感謝申し上げます。

坂井貞夫氏の説明を聞く福田紀彦市長

動き
movement

沖縄県立総合精神保健福祉センターの動き

沖縄県立総合精神保健福祉センター 所長　宮川　治

今日もタイ、シンガポール、フィリピン、香港、中国、台湾、韓国からの直行便やクルーズ船でやって来る外国人観光客と内地からの観光客が那覇のメインストリート国際通りを闊歩する沖縄からの報告です。

沖縄県立総合精神保健福祉センター（以下当センター）は、沖縄本土復帰（昭和47年）に先立つ昭和44年１月財団法人沖縄県精神衛生協会立沖縄精神衛生相談所・メンタルクリニックとして誕生しました。民間として設立運営され、クリニックという診療機能も持っていました。昭和49年に無償で県へ移管し、沖縄県立精神衛生センターになりました。その後数回の名称変更と新築移転を経て現在に至ります。

先代所長が全国に先駆けて始めた集団認知行動療法と作業療法を組み合わせた「うつ病デイケア」が全国的に広まり、日本うつ病学会奨励賞を受賞しました。その後は、全国からの見学者が絶えませんでした。そのデイケアも昨年終了し、引き続いてそのノウハウを用いて、依存症ショートケアと引きこもりデイケアを開始しました。現在は徐々に認知されて、参加者が増えつつある段階です。

上記の依存症、ひきこもりに加えて災害時精神医療体制整備事業が今年度事業の３本柱です。沖縄県では、国立病院機構琉球病院がDPAT隊をいち早く編成して、熊本地震時も大活躍してくれました。現在はマニュアルの改訂作業を進めています。

福祉サービスの部門では、通院医療費公費負担及び精神障害者福祉手帳の判定作業、精神医療審査会の審査などの業務量が年々増加するにもかかわらず、それに対応する職員数が増加しないというジレンマに陥っています。

大変な状況ですが、22名の職員（うち７名は非常勤）とともに沖縄県の精神保健福祉向上のためにますます精進していくつもりです。全国の皆さまどうぞよろしくお願い致します。

動き
movement

富山県心の健康センターの動き

富山県心の健康センター　所長　麻生光男

平成29年４月に富山県立中央病院精神科から富山県心の健康センター所長に就任しました。当センターは富山市南部に位置し、同じ建物内には富山市保健所もあります。まわりには田んぼが残っており、神通川が流れ自然豊かな土地柄で、近くには富山空港や高速道路があり交通の便にも恵まれています。

平成29年度より当センターでは、精神障害者の地域での生活を支援するアウトリーチ事業を開始しました。目指しているのは、ストレングスモデルを使い精神障害者のリカバリーを支援していくことです。平成29年８月に国立精神神経医療・研究センターの多職種による包括型アウトリーチ研修を受講し、リカバリーとストレングスモデルを学んでまいりました。一回の研修では十分な理解はできませんが、精神障害者が地域で生活するには必要な支援であり、アウトリーチを実践していく中でリカバリーとストレングスモデルの理解を深め、効果的な支援を目標としていくことの重要性を再認識しました。現在、当センターの医師、保健師、臨床心理士、それと地域の支援者とともに、障害者へのアウトリーチによる支援を継続しております。訪問を続けていると、当事者の言動が良い方向に変化してきているのを感じます。

このほか、当センターでは依存症の相談事業を行っており、そのなかで薬物依存症は、平成26年度４名、27年度６名、28年度は８名の利用がありました。また、平成28年秋よりNPO法人富山ダルクリカバリークルーズと共同して、薬物依存症を対象として第１、第３金曜日の午後に、全10回の予定で、せりがや覚せい剤再発防止プログラム（SMARPP）を実施しております。富山県内には支援の必要な方が相当数いると思われますが、まだまだ参加者は少ない状況です。

当センターではアウトリーチと依存症の支援が大きな課題となっており、今後とも関係機関と緊密に連携しながら事業を推進していくこととしております。

公益社団法人日本精神保健福祉連盟役員並びに名誉会長一覧

平成30年２月現在

１.理　　事（16名）

【代表理事　２名】

会　　長	鮫　島　　健	公益社団法人日本精神科病院協会　名誉会長
理 事 長	鹿　島　晴　雄	国際医療福祉大学大学院教授・慶応義塾大学医学部客員教授

【常務理事　３名】

常務理事	大　西　　守	日本精神衛生学会　常任理事
	冨　松　　愈	公益社団法人日本精神科病院協会　副会長
	竹　島　　正	一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会　会長

【理　　事　11名】

理　　事	小　島　卓　也	公益財団法人日本精神衛生会　理事長
	樋　口　英二郎	公益財団法人復光会　常勤理事
	米　谷　和　春	公益財団法人矯正協会　企画調査室長
	中　田　克　宣	公益社団法人全日本断酒連盟　理事長
	末　安　民　生	一般社団法人日本精神科看護協会　会長
	田　中　慶　司	公益社団法人アルコール健康医学協会　理事長
	渡　辺　洋一郎	公益社団法人日本精神神経科診療所協会　会長
	竹　中　秀　彦	公益社団法人日本精神保健福祉士協会　相談役
	大　野　史　郎	公益社団法人日本精神科病院協会　理事
	高　畑　　隆	一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会　理事
	田　中　正　博	全国手をつなぐ育成会連合会　統括

２.監　　事（２名）

松　村　英　幸	公益社団法人日本精神科病院協会（医療法人社団根岸病院　理事長・院長）
丸　山　　晋	一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会　監事

３.名誉会長（２名）

保　崎　秀　夫	慶應義塾大学名誉教授
仙　波　恒　雄	公益社団法人日本精神科病院協会　名誉会長

【　役員任期　平成29年６月16日より
平成31年の定時社員総会終了まで　】

注１　公益社団法人日本精神保健福祉連盟定款
第27条（役員の任期）によるものとする。

〈編集後記〉

連盟だよりNo. 61をお届けします。

本号では、精神・障害保健課長に就任された武田康久先生からご玉稿を頂きました。今後の精神保健福祉行政の進め方について熱く語っていただきました。深く御礼申しあげます。

また、「アートとトークによる多様性尊重の社会づくり展」のご報告を、竹島正全国精神保健福祉連絡協議会会長よりいただきました。展覧会とトークを中心としたイベントの組合せによって、より多様なメッセージを社会に発信されたことに敬意を表します。

第65回精神保健福祉全国大会、第17回全国障害者スポーツ大会も無事終了しました。
地元をはじめ、関係された多くの方々に、紙面を借りて改めて感謝申しあげます。

本年も、皆様からのますますのご協力をお願いいたします。

（M. O.）

編集委員会

委員長　大西　守　公益社団法人日本精神保健福祉連盟常務理事
委　員　仲野　栄　一般社団法人日本精神科看護協会業務執行理事
高畑　隆　一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会理事
塩入祐世　公益社団法人日本精神神経科診療所協会会員
東京精神神経科診療所協会理事
寺田一郎　（社福）ワーナーホーム理事長

発　行　平成30年２月１日

発行者　公益社団法人　日本精神保健福祉連盟
会長　鮫島　健
〒108-0023　東京都港区芝浦3-15-14
TEL 03-5232-3308　FAX 03-5232-3309
Email：f-renmei@nisseikyo.or.jp
HP：http://www.f-renmei.or.jp

印　刷　社会福祉法人　新樹会　創造出版